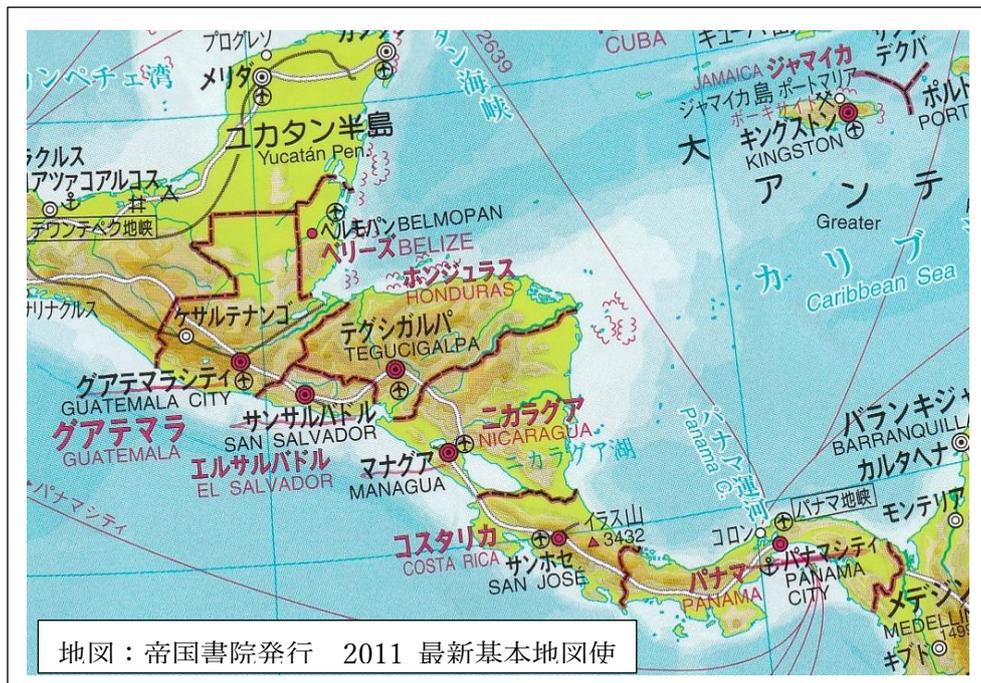


ダリエン地峡・パナマ・コスタリカ・ニカラグア・ホンジュラス・グアテマラ



ダリエン地峡

ダリエン地峡についてあらかじめ説明したい。アメリカ大陸と南アメリカ大陸を繋ぐ地峡。コロンビア側チヨコ県北部と中央アメリカのパナマ、ダリエン県にまたがる地域で、開発が進んでいない沼地や熱帯雨林が残る地域である。パン・アメリカン・ハイウェイも通じていない。この区間はコロンビアのトゥルボからパナマのヤビサまでの 106 km にわたる。コロンビア側はアウトラ川のデルタ地帯が大勢を占め、沼地が 80 km にわたって広がっており、大半は沼地である。バウル山脈がコロンビアの太平洋岸に沿ってパナマまで延びている。パナマ側は 60m の谷床から最高 1,845m (ダリエン山脈) に達する山がちな熱帯雨林である。(Wikipedia による)

地図は下の画像程度しかない。



コロンビア側パナマ国境付近ジャングルの小道 カヌーで渡る、パナマ側への越境者が多いという。

トゥルボという所から出発し、あばら家 2, 3 軒と牧童相手の酒場が 2 軒しかないパランキリータという部落に着き馬小屋に宿泊。翌朝、案内人ハイロとそれぞれ 14 キロ分の食料の入った袋 2 個とハイロの荷物のうち 1 個分の袋をラバの背に積み込んだ。後は各自の所持品をリュックに出発、やがてパランキリータの町を南北に貫く未舗装の道路は町はずれで途絶えた。次にダリエンに入ると道路標識に地名がなく KM27 とかの数字表示であ

る。ダリエン地峡を通るには内陸ルートと海岸ルートがあり普通は海岸ルートを通るのだが、あえて内陸ルートを選択したのだが、ハイロは不満たらたらで先が思いやられた。宿泊した農園にはかつてガイドをしたことがある老人が2日間ならば案内してよいと言ってくれた。KM29: 太古の面影をとどめて熱帯雨林。老人は珍しい鳥、花、動物など話してくれた。アトラト沼に近づくにつれて足元まで水が押し寄せて、カヌーに頼るしかなかった。KM29 地点から KM40 地点まで川筋を遡る。行程は 11 km である。乗り物を利用するのはマゼラン海峡以来である。KM40 地点から、西方、アトラカ川の面したプエルト・アメリアまで 23 km。湿地帯、全長 9m のモーター付きカヌーで進む。住民は黒人。物珍しそうに集まってきた。ハイロと言い争いがあり別れることにする。替わりに男二人を雇った。インディオのチョコ族部落の女たちは上半身裸であった。その先、コロンビア・パナマの国境地点を示す割れ石があった。国境地点では検疫があった。パナマ国内に口蹄疫が入るのを防ぐためであった。貴重な 1kg 入りの粉ミルク缶詰が没収された。次にクーナ族が住むバイエ村に入る。隣接した地域に住んでいるのに、風俗習慣は対照的であった。



クー族は目鼻立ちが整い、アジア人に近い顔立ち、何よりも驚いたのは女達がパッチワークのスカートをはき、赤や黄色の華やいだ胴着を身に着けていることであった。その晩、首長の家でバナナなどを御馳走になった。ここで新しくポーターを雇った。体長 2 m 以上もある緑色の大蛇、毒蛇に出会った。次にチョコ族の村のバザールに着いた。村長の息子ベルトがポーター兼ガイドを引き受けてくれることになった。3月19日、パランキータから 25 日目、ウスワイアからは 780 日、とうとう二人はパナマ市に入った。

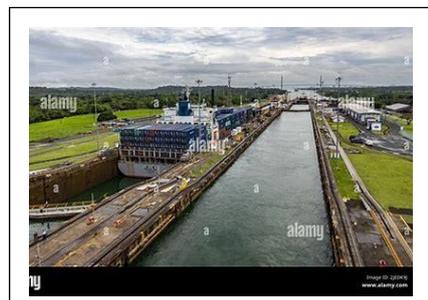
写真:エンブラ族の少女

パナマ

パナマではヨシコと赤ん坊のアユミと会うことになっており、地元新聞の「パナマ中で最も幸せなカップル」と報じていた。ところがパナマに到着した日のこと、災難に遭った。いきなり 4 人の少年達に殴られ時計、カメラが奪われた。丁度その時、パトカーがやって来たが、警官は何の手立てを打ってくれなかった。ヨシコと娘のアユミが私に会うためやって来た。アルゼンチンのメンドーサで出産のため別れて以来のことであった。内陸部のバンガローで 6 ヶ月ほど暮らし、1979 年 9 月 24 日、ヨシコとアユミを乗せたジェット機は離陸していった。今度会えるのは、いつ、どこであろうか。ヨシコと別れて再び旅を続けた。



パナマ・シティ 下: カナル・ゾーン



サッチャー・フェリー橋、そこから先は延長 11 kmにわたる運河地帯を横切ることになる。奇しくも、そこに足を入れた 1979 年 9 月 29 日の 2 日後は、このカナル・ゾーンがアメリカ合衆国からパナマ共和国に返還されることになっていた。10 月 1 日午前零時、運河の町アンコンの上空に祝賀の花火が夜空一杯上がり壮観だった。新しい時代の先ぶれにふさわしい眺めであった。コスタリカに向かって数百キロ、真っ直ぐ延びる幹線道路は片側一車線でごった返していた。ヨシコと子供に別れてから、焼けつくような舗装道路、食欲は全然なく、午後からは毎日のように雨、びっこ（ママ）を引いて歩いた。



運河を渡る橋



アンコン

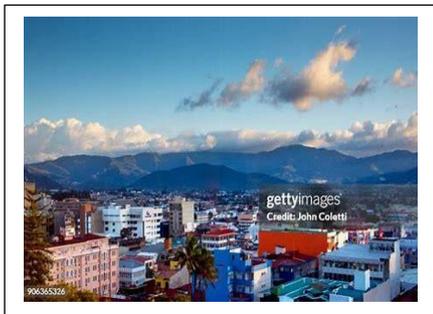


タビット

チョレラ市で病院へ行った。アメリカで研修を受けたという女医の診断では慢性化した喉の感染症、壊血病だという。ペニシリンを打ってもらい再びびっこを引いて歩いた。土地は耕されていたが干からびていた。午後になると真っ青に晴れていた空に積乱雲が現れスコールになった。タビットという町に到着した時、完全に体調を崩し、所持金は全部で 70 ドルしかなかった。頭がくらくらし倒れてしまった。幸い白い衣服の尼僧が養護院に運んでくれ、数日お世話になった。

コスタリカ

入国は簡単なものだった。このところ不調であった体調が取り戻し、一日 40 kmの行程をこなすことが出来た。奥地に進むにつれて、大きなバナナの木が目立つようになった。1979 年 11 月 9 日、とうとうサンホセ（コスタリカの首府）に到着、ウスワイアから 13,000km の地点である。（1974 年セバスティファン・スノーが西半球連続最長距離徒歩旅行の記録を樹立。同時にここで旅行に終止符を打ったのもここである。）サンホセに留め置き郵便物の中に、イギリス滞在中のヨシコからの郵便があり、近々、日本に帰ること、また 6 年も会っていない兄のアントニーがイギリスからやって来るのとのことであった。兄がやって来るまで、距離を稼ぐため先のプンタレナスまで歩いた。いかにもさびれた港町であった。暮らしている住民は、実は深刻な食料不足で毎日のように脅かされて続けているとのことで、主食である豆類を積んだチリからの貨物船を心待ちにしていた。



サンホセ



プンタレナス



リベリア

6 年も会っていない兄、アントニーがサンホセに到着すると、兄の気前の良ささのお陰で 1,000 ドルの軍資金を

得、滞在中 12 日間、豪華な生活をして帰国して行った。プンタレナスから、アメリカ縦断ハイウェイに沿って北西に進路をとる。二度ほどすれ違った車の運転手から、「長さが 1 m 以上もある蛇の大群が道を横切っているから気をつけるように」との忠告を受けた。夕刻まで 8 匹の大蛇に出くわした。その晩、キューバからの亡命者という農場に泊まりハンモックで寝たが、朝、目を覚まして下を見ると十数匹の蛇がゴロゴロしていた。サンホセから 3 日目、食料店にオヤジが泊まってもよいと言ってくれたが、泊まらず距離を稼ぐため先を歩きキャンプした。翌日、トラックの運転手が車を止めて「食料店のオヤジが昨夜、強盗に襲われ死んだ」といった。(7 年間の徒歩旅行で類似の事件に数回巻き込まれそうになったことがある)。しばらくして、リベリアという町近くを歩いた。たまたま、見慣れたオレンジ色、同じタイプのテントだった。彼はイギリス人、サウザンプトンからやって来た衛生局の調査官だった。招待を受け御馳走になった。驚いた事に、この地方の人が食べる米とスープを実に美味しそうに食べていた。自分といえば 3 年の歳月を外国ですごしているのに、いまだ現地の食事に馴染んでいない。翌朝。彼らが車で東に向かった。3 日間かかって国境に達した。

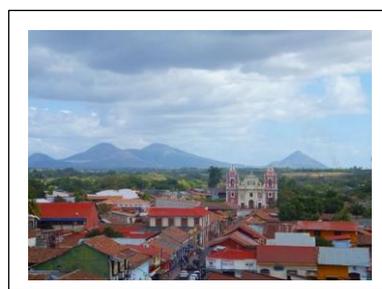
ニカラグア

泥んこの道の国境地帯を横切ってニカラグアに入った。入国管理事務所では形式的な取り調べ。国境線を過ぎ歩いて行くと、道が破壊され車は通れなくなっている。廃墟と化した土地をしばらくの進むと、まるで別世界の幻のように、広々とした青いニカラグア湖が見えてきた。リバスという町に向かう途中、いたるところ路肩に車両の残骸が横たわっていた。リバスの町に着き一夜を赤十字の建物の床の上で過ごす。翌朝、見た風景は、一層、悲惨な風景で、銃弾ハチの巣のように穴だらけにされていた。この地域を歩いていると、運転手や乗客に「憎きヤンキー野郎」と罵られた。(反アメリカ主義の気風も根源は 19 世紀の半ばに始まる)。

首都マグアナに到着。街路は物音一つせず静まりかえっていた。消防署の屋根に上って見る事が出来たのは、かつて都市が存在していた湖と草原であった。マグアナは 1972 年の大地震によって壊滅的な損害を受けたからである。大地震の際、アメリカからの膨大な救済援助品が贈られたが、警察軍に私腹を肥やすや輩らがいて、7 千人が飢えと怪我で亡くなったという。都市を離れ田舎に入ってから、ホンジュラスに向かうニカラグアの北部のルートを出来る限り素早く歩き通すことにした。僕の姿かたちはアメリカ人のそれと殆ど区別がつかないので攻撃目標にされた。心に印象的に残ったことは、パイアの実を食べろと言ってくれたあの貧しい農夫であり、シャツを恵んでくれた若い兵士であった。さらば、ニカラグアよ。ぼくは貴国の幸運を祈る。



ニカラグア湖



マグアナ



ニカラグア美人

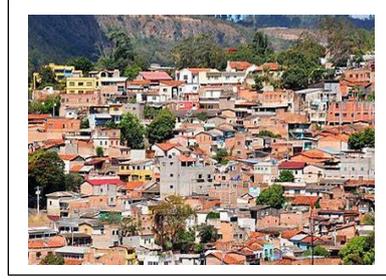
ホンジュラス

国境線を越え、夕暮れ時のうすい闇に包まれたホンジュラスの町は荒涼たるニカラグアで見たどの町より明るく、希望が持てそうな国であるように思えた。驚いた事にスーパーマーケットにさえ回転式ドアまでつい

ており、夢にまで見ていた食料品を手に入れることができた。エル・パライソに着いたその晩、交番に泊めてもらった。エル・パライソを後にして、ホンジュラスの首都テグシガルパへと進んだ。この町は山々に囲まれた盆地の真ん中にある人口 50 万人程の都市である。ガラスや鋼鉄製の高い塔が立ち並び、一応「近代化」への姿を示している。しかし、赤瓦と白壁の小さな家々の背後には、格子で遮られた中庭が見られ、植民地時代の名残がとどめられていた。夜、テグシガルパへ向けて出発。周囲が険しい地形に変わった。数日前から悩まされていた腸の感染症が悪化し、歩くのに難儀した。コマヤグラに到着。紹介された教会の司教はおらず軒下で一泊。いつ止むとも知れない冷たい雨の中、びっこ（ママ）を引いて歩いた。テグシガルパの医者から貰った薬はまるで効き目なし。体中蚊に刺される。



エル・パライソ

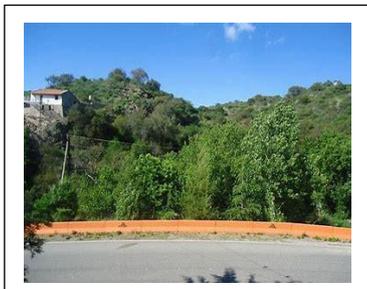


テグシガルパ

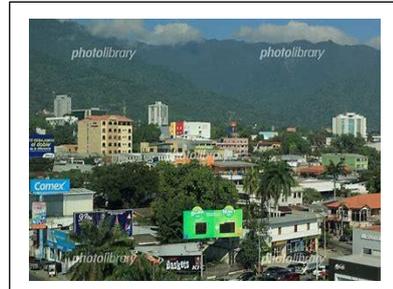


テグシガルパ市街

ポトレリロスを超える頃から、道は下り坂になり、蒸し暑い低湿地帯へと入っていった。一步、一步踏み出すごとに膀胱に鋭い痛みを感じ、倒れしまった。最寄りの町、サン・ペドロの消防署に運ばれてご厄介になる。翌日、コロンビア人医師の診断を受けた。感染症にかかっており栄養状態も悪い、疲労が重なり3週間の休養が必要と診断された。今一度、必死の覚悟をして、夜明けに行動を再開した。それは距離をかせぐと同時に病気の治療を目的とするものである。たった1キロでも距離を稼ぐということは気分によいものである。国境の町ヌエバ・オコテペックまで 40 kmであった。しかし、そこには険しい山岳地帯であった。町に着いたときは夜半、なんどこの日は 52 kmも歩いたのであった。



ポトレリロスへの道



サン・ペドロ



ヌエバ・オコテペック

グアテマラ

アグア・カリエンタの入国管理、例によって簡単には済まなかった。グアテマラ市到着した時、所持金は現金 50 ドルと額面 400 ドルの為替だけだった。合衆国まで約 2,500 km、到着までに4ヶ月はかかるだろう。グアテマラ市に到着してみると大都市なるが故の問題に直面しなければならなかった。泊まる所がないのである。警察、消防署もだめ、訪ねていった新聞社も旅行記事に関心がないという。グアテマラは経済面では最も活発な動きを見せているが、影の部分、弾圧的な軍事独裁政権でありすべての市民の行動に官憲の目が光っているからである。グアテマラ市には2種間ほど滞在。この間、英国領事館を訪ね、スポンサーからの靴、母からヨシコに男の子が生まれたという知らせは勇気づけられた。バチーシアという所でアメリカン・ハイウェイを離れ旅行者の憧れの地、アティトラン湖に通じる道を歩いた。インディオの女性の一团は色とりどりの服を着て実に美しかった。

アティトラン湖が木々の間から一筋のコバルト・ブルーの帯のように見え、背後に三つの火山が見え、ウエウエテナンゴの町を出てから3日後、国境を越えた。



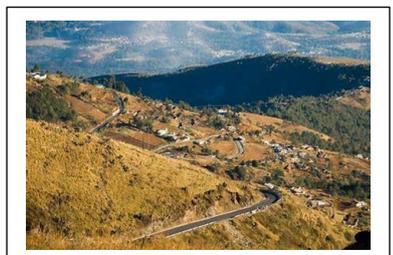
グアテマラ市一望



グアテマラ市内



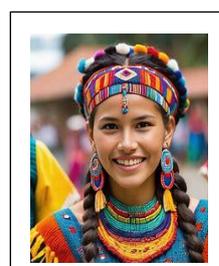
アティトラン湖



ウエウエテナンゴ



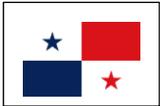
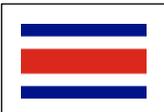
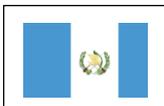
民族衣装を着た老婆



グアテマラ美人

(この項目完)

中米5か国 概要

国名	パナマ	コスタリカ	ニカラグア	ホンジュラス	グアテマラ
国旗					
面積	75,416 km ²	41,060 km ²	129,494 km ²	112,090 km ²	108,890 km ²
人口	432万人	約500万人	630万人	946万人	1793万人
首都	パナマ	サンホセ	マナグア	テグシガルパ	グアテマラ・シテイ

写真はいずれも無料画像使用。地図は帝国書院発行「最新基本地図 2011」使用。

上記：中米5か国概要は、外務省各国案内 a など使用。